



「日本語・生活学習プログラム（仮称）」の導入
に対する当事者の意見

OCHANTE MURAY Rosa Mercedes
オチャンテ 村井 ロサ メルセデス

桃山学院大学准教授

2026年10月20日

発表者について



- 名前
- Rosa Mercedes Ochante Muray
- オチャンテ 村井 ロサ メルセデス
- 日系4世のペルー人 / 移民1.5世代
- 1996年12月来日
- 日本での滞在歴29年
- 日本での生活基盤が整っている
- ※未成年であったため、日系3世の扶養として
「定住者」→「永住者」



中学校生活1997年1月～3月卒業

私 15歳（中等教育4年）→中学校3年生
兄 16歳→学齢超過（当時の校長先生の判断で入学）

弟 6歳（小学校2年）→保育園

・弟は母語よりも日本語の方が得意

同じ兄弟であっても、来日した年齢によって：

- ・適応までの経験
- ・日本語学習の過程
- ・学校生活の状況等が異なる

1997年4月～定時制高校進学

ほぼ日本語ゼロという状態で兄と高校に入学（当時の校長先生の判断で入学）

- ・継続的な日本語学習：継続的に日本語を学ぶ場が提供され、日本語能力試験（3級、2級）に合格し、大学進学を目指した。
- ・支援体制の整備：高校3年生からスペイン語学科の学生が支援に入り、母語によるサポート、通訳（曖昧にしか理解できなかった内容を、母語で補うことで正確に把握）

日本語を学ぶ機会と日本語力の形成

私

来日
当初

日本語がほとんど
わからない状態

高校
日本語力の向上

学校に通う機会があり、
日本語の規則・マナー・
社会のルールなどを学ぶ。

大学
学びの広がり

日本のマナー・社会的ルール・
アカデミックな日本語など、
より高度な日本語を学ぶ。

社会人として
学び続けている

仕事や生活の中で
日本語を使い、
さらに学び続けている。

学校に通う機会があり、日常会話だけでなく、規則・マナー・社会的な知識・学術的な日本語も
学ぶことができた。

父

来日
当初

日本語がほとんど
わからない状態

地域の日本語学校
で学習

ひらがな・カタカナを学ぶ機会を得た。
しかし、それまでに持っていた
知識やスキルを十分に活かすことは
難しかった。

生活に必要な
日本語を習得

長い時間をかけて、
生活に必要な日本語を
少しずつ身につけていった。

学習機会の制約

夜勤・昼勤などの勤務形態により、
継続的に学習時間を確保すること
が難しく、日本語を学ぶ機会
は限られていた。

日本語力の形成には、本人の努力だけでなく、
学校教育を受ける機会や学習環境、生活・労働環境も大きく影響する。



国・地方公共団体の役割

日本語や生活に関する学習を、外国人住民の生活の安定と社会参加を支える基盤として位置づける。

国・地方公共団体が必要な予算と実施体制を整え、継続的に学習機会を保障する。

受入れ初期に学習する機会を設けるとともに、来日後も必要に応じて学び続けられる仕組みを整える。

**学ぶ機会を個人の努力だけに委ねず、
社会全体で支えることが重要である。**

一人ひとりに合った学習環境

日本語、生活情報、社会制度や権利に関する知識を、実生活に結びつけて学べる内容とする。

オンラインと対面を組み合わせ、地域の日本語教室やNPOなどとも連携する。

無料の試行期間などを設け、利用者の意見を取り入れながら改善する。

受講料を設定する場合には、所得や生活状況に応じた減免措置を検討する。

仕事や子育てなど、それぞれの生活状況にかかわらず学べる仕組みを目指す。





公平性と実効性を確保するために

- ・受講や学習内容の理解度を在留審査に反映する場合には、その目的や具体的な方法を慎重に検討する。
- ・学習機会が十分に確保されていることを前提とし、仕事、健康、家庭の事情など、個々の状況にも配慮する。
- ・受講できなかった場合の支援や、学び直しの機会を設ける。
- ・制度の運用状況を国・地方公共団体が継続的に確認し、必要な改善につなげる。

受講を求めることと、誰もが公平に学べることを両立させる制度設計が必要である。



外国人住民と地域社会の双方が学ぶ

- ・外国人住民が日本語や生活ルールを学ぶことは、安心して暮らし、社会に参加するための大切な機会である。
- ・同時に、地域住民にも、異なる文化や生活背景への理解を深める機会が必要である。
- ・やさしい日本語や多言語による情報提供、相談体制の充実、住民同士の交流を進める。
- ・共通のルールを尊重しながら、文化の違いについて対話できる地域づくりを目指す。

外国人住民の努力と、受け入れる地域社会の取り組みを両輪として進める。



当事者とともにつくり、改善する

- ・ 多様な国籍、言語、在留資格、年齢、生活背景を持つ外国人住民の意見を聞く。
- ・ 共通の基礎学習と、一人ひとりのニーズに応じた学習を組み合わせる。
- ・ 教材やプログラムを試行し、理解度や使いやすさを確認して改善する。
- ・ 外国人当事者が教材作成や制度評価に参加できる仕組みを整える。

外国人住民を制度の対象としてだけでなく、制度をとともにつくるパートナーとして位置づける。

日本語・生活学習プログラムへの期待

このプログラムが、外国人住民の日本語や生活に関する学びを支えるだけでなく、地域社会とのつながりを深め、安心して暮らし、社会参加できる環境づくりにつながることを期待します。

**外国人住民と地域社会がともに学び、
ともに成長できる共生社会を目指し
ていきたいと思います。**





ご清聴

ありがとうございました。

¡Muchas gracias!

Muito obrigada!

Merci beaucoup!

Thank you very much!